

令和 元 年 10 月 12 日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201980008

氏 名 瀬 戸 陽 子

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先：都市名 サンティアゴ・デ・コンポステラ (国名 スペイン)
2. 研究課題名（和文）：農山村観光と女性サイクリスト-カミーノ・デ・サンティアゴの自転車巡礼を事例に-
3. 派遣期間：令和元年5月8日 ～ 令和元年9月13日 (128日間)
4. 受入機関名・部局名：サンティアゴ・デ・コンポステラ大学
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

【派遣先で従事した研究内容】

2019年5月8日から約4ヶ月間、スペイン、ガリシア州都のサンティアゴ・デ・コンポステラ市を拠点として、サンティアゴの巡礼道におけるサイクルツーリズムの状況について、フィールドワークを中心に調査研究活動を行った。研究者自らが実際に巡礼道を徒歩あるいは自転車で、巡礼証明書が取得できる規定の距離（徒歩 100km・自転車 200km 以上）を踏破した。渡航期間中の全走行距離は 1500km である。実地調査は「フランス人の道」と「ポルトガル人の道」を自転車で走行し、地域的な差があるかどうかの補足的調査を行なった。自転車と徒歩の比較をするため「フランス人の道」は徒歩による巡礼も行なった。8月から9月上旬にかけて走行した「フランス人の道」においては少数ではあるが、旅行中の他の女性サイクリストへのヒアリング調査も試行した。

【研究状況】

徒歩や自転車で長距離を移動するツーリズムは、観光における気候変動への緩和策の一つとして考えられる。極度にモータリゼーションが進んだ日本で、今後このようなツーリズムが定着することは、交通渋滞の緩和、自然環境保全、滞在時間の拡大、健康増進に有益であると考えられる。女性徒歩巡礼者は巡礼に伴う農山村観光の拡大を担う重要な地位を確保している一方、女性サイクリストは、ルートやサポート体制などの面で、徒歩巡礼とは状況が異なることがわかった。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

【研究成果発表等の見通し】

派遣期間中に得られた調査結果は、先に進められている日本国内のサイクルツーリズムの現状との比較、またスペイン、サンティアゴの巡礼路と姉妹提携をしている和歌山県の熊野古道との比較を通じて、日本の農山村地方におけるサイクルツーリズムや、サイクルツーリズムの持続可能な発展につながると考えられる女性サイクリストのエンパワーメントについて論文執筆を進める予定である。これらの論文はその後、書籍にまとめられる予定である。さらに 11 月に行われる自転車活用推進団体主催の講演会などで、渡航期間中に得られた知見を広く一般に共有する予定である。

【今後の研究計画の方向性】

当初は実地調査中（主に巡礼到着地であるサンティアゴ・デ・コンポステラ市内）で出会えた女性サイクリストを対象に協力を依頼し、個別にライフストーリーインタビューを行う予定であったが、巡礼を終えた直後はツーリストが非常に疲れており、市内滞在も非常に短いこと、また紹介者なしに会見に応じてくれる可能性を見出せなかったことから、期待通りのヒアリングができなかった。そのため今後はフェイスブックなどのフォーラムを経由して電子メールにてインタビューを行う予定である。これと同時に先行研究の資料収集を進める。追加調査から得られた知見も含めて、ジャーナルへの投稿を順次進め、2021 年～2022 年の提出を目指している博士論文に本研究の成果をまとめる予定である。アウトリーチ活動としては和歌山県上富田町のサイクルツーリズム整備事業への協力を行い、南和歌山地域のサイクルツーリズムの持続可能な発展に貢献したいと考える。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

【Host Researcher からの支援】

渡航期間中、Host Researcher の Xosé Santos 教授の直接的な働きかけにより大学施設への ID パスワードを付与していただき、またオフィスの一角を貸していただけたので、巡礼道への実地調査以外の時間はライブラリーの資料収集に当てることができた。Santos 教授の紹介で巡礼博物館でのフォーラム聴講に参加し、世界から熊野古道を含む日本の巡礼がどのように見られているかを知ることができた。巡礼に出発する前には、旅の注意などを教えていただき安全に実地調査が終えられるよう指導をいただくことができた。また、巡礼終了後は面談を通じ巡礼とガリシア州についての理解を深めることができた。サンティアゴ・デ・コンポステラ大学と和歌山大学は協力締結を結んでおり、今回の訪問が両大学間の交流をさらに深める一助となることを期待する。

【学外のネットワーク】

実地調査の目的の一つ「農山村地域でのビジネス創成」に対するフィールドワークでは、観光関連団体や旅行代理店などの学外の関係構築が重要である。今回、民間交流団体「ガリシア日本協会」の塩澤恵氏、着地型旅行を提供している「ピリグリム.es」社から協力を得ることができた。これにより現在の巡礼者に対する観光サービス構造を短い期間で効率的に調査することができた。民間団体のネットワークは短期間で得られないことが多く、この 2 団体とのネットワークは貴重であると考えられる。現在の日本では「徒歩・自転車などの移動で宿泊を伴う着地型旅行」は限られた地域のみだが、気候変動、健康志向、自然回帰への意識の高まりを受け、今後拡大が期待できる観光分野と考える。さらには農山村地域での「インバウンド対応」についても知見を得ることができた。サンティアゴの巡礼道はこの二つの分野で世界の先進地域の一つと言える。

【実地調査のスキルアップ】

サイクルツーリズムはその土地の地理的特性や文化構造などに大きく形態が左右される。実走をしてみて初めてその因果関係が理解できる場合が多い。サイクリングによる実地調査には走力の他に、地域住民とのコミュニケーション能力、情報収集能力等の調査スキルが必要である。今回初めての海外でのサイクルツーリズム調査であったが、事故なく無事に終了することができ、自身の実地調査のスキルアップにつながったと考える。